

楽曲選択が身体表現活動に与える影響について*

— 即興的身体表現の調査から —

井 中 あけみ
高 橋 うらら**

I. はじめに

1. 問題の所在

子どもの音楽表現には、歌いながら身体を動かして行う音楽表現、身体の動きを伴った楽器（特に簡易楽器）での音楽表現などがある。これらの表現は、歌やメロディーのリズムやダイナミクス（dynamics）、質感などを感知し、その音楽の持っているイメージを、身体を通して表現していくものといえよう。子どもが「何か」を感じ、自分以外の外界に表現を求めようとする行為からは、その子どもの様々な成長も見出すことができるのである。

小島は表現について、『『表現』は、外的なものの働きかけによって生じた自分の『内なるもの』を、素材を通して自分の身体の外に表すことである。』¹⁾と述べている。

また、この「内なるもの」については、『『内なるもの』とは、経験、観察、記憶、イメージ、思考、情動、感覚、感情、などが絡み合って起こすところの動きということができる。』²⁾と解説している。

ところが近年、このように「内なるもの」対し、十分な経験を持つことができない子どもがいることは、社会問題としても捉えられている。それは例えば、孤立して人と関わる力が弱い、人の立場に立って物事を考えることができない、自然や生命あるものに対する関心が薄いなどである。また、この問題を抱えて年月を過ごしてきた学生が、保育者を目指す現状に数多くいることは、残念ながら事実であろう。

そのような学生たちに、保育者養成課程「表現」³⁾のカリキュラムを根底に、子どもの世界を共感し探求する態度を期待するとなると、その不安は増々深刻なものとなるであろう。これらの問題を抱えながら、学生たちが保育者として子どもの表現教育に介入することができるかどうかは、まずはここで小島のいう「内なるもの」を含む彼らの「感じ方」に注目すべきではなかろうか。

* 本論は、2014年5月17日(土)・18日(日)の第67回「日本保育学会」にて、ポスター発表を行った『創造的な身体表現活動の「きっかけ」となる楽曲選択について』(P142014C)のデータを基に加筆したものである。

** 東京都市大学 人間科学部 児童学科 准教授

1) 小島律子・澤田篤子編『音楽による表現の教育—継承から創造へ—』p.2, 晃洋書房 1998年

2) 小島律子・澤田篤子編『音楽による表現の教育—継承から創造へ—』p.3, 晃洋書房 1998年

3) 保育所保育指針表現(音楽)、幼稚園教育要領「表現」抜粋、保育士養成課程等検討会「保育士養成課程等改正について」(中間まとめ)『保育士養成課程等検討会』, 2010年3月24日

小島は、「自然にまかせていては表現が発展しない、という危惧をもつ人もあろう。その危惧を解消するうえで、他者の存在が外界との新たなズレを意識させてくれるのである」⁴⁾ といっている。子どもが外界や他者との関わりを持つため、能動的に表現を試み、試行錯誤を繰り返す時、保育者はその子どもが抱えるズレや捻じれを意識させる立場にあるのである。

しかしながら近年、メディアの影響は子どもたちにとっても保護者にとっても絶大である。保育者の意志に関わらず、アイドル歌手たちの曲に流行の振付をして歌う、流行のアニメ曲を歌うなど、スマホなどで該当曲の情報を入手し、その既存の表現方法を子どもに提供している保育が実在している。年齢的に相応しくない歌唱を行う、華やかさや見かけの出来栄に重きを置いた合奏を行うなどの表現方法には、危惧されるものが多い。これら諸問題を含め、保育者養成校の表現教育において意識すべきことは、子ども本来に備わっている能動的表現を察知し理解できる保育者養成である。子どもたちの感性を育む方向性を察知し、子どもたちが自己を表現することができる保育者育成のため、我々表現研究者はその実証的な研究を見過ごしてはならないと考える。

2. 保育者としての音楽的経験

保育者が表現に対して音楽的な発想や豊かな音楽的感性を創造的に積み上げていくことは、子どもの表現を理解し育てていくことにつながるのはいままでもない。そのために、養成校として学修できる創造性豊かな音楽表現教育の充実を図らなければならない。

保育者を目指す学生にとって、「表現」という活動の学修には、音楽表現、造形表現、言語表現、身体表現、さらにそれらの総合的な表現がある。子どもの表現は、これらがひとつながりに表れることが多々あり、保育者は様々な表現方法（分化的・総合的）を蓄積しておくべきであると考え。従って我々教員は、個々の表現分野の共通要素を理解し、自然な活動が行えるような指導を展開する必要がある。中でも、音楽表現は、身体表現との関わりが密接であり、演奏（ピアノ・歌唱・合奏）のための技術習得に偏りがちな学習を、別の角度から感知し体験することは、表現教育の新しい手法を創るきっかけに繋がると考える。

3. 本研究の目的

保育者が子どもたちの表現活動を理解し、子どもたちが他者や外界と関わろうとするための表現に寄り添うためには、保育者自身その表現を経験していることが重要である。その中でも音楽教育が、自己の演奏という形に固定することなく、様々な角度から音楽を捉え、感じ表現する活動を試みることは、表現活動の充実に役立つものと思われる。橋本は、「子どもが音楽表現を行う過程において、音のみを媒体とするだけでなく、意識的、無意識的に他の媒体を介在させることもあり、むしろそれが音楽行動の本来の姿であるともいえる。」⁵⁾ といっている。この橋本のいう「他の媒体」は、音楽を「きっかけ」としてどのような表現となるのか。本論では、身体の活動が楽曲から受ける影響について、その感じ方を調査し、

4) 小島律子・澤田篤子編 小島律子著『音楽による表現の教育—継承から創造へ—』p.6, 晃洋書房 1998年

5) 小島律子・澤田篤子編 橋本龍雄著『音楽による表現の教育—継承から創造へ—』p.136, 晃洋書房 1998年

学生たちの音楽への感じ方を分析していくこととする。身体表現の研究者たちは、音楽に関して以下のような表現を用いている。

「ダンスムーブメント」による指導法を唱える飯田は、音楽の曲想に合った動きをイメージして踊ることで「音楽に誘発されて各人が思いのままに動ける」⁶⁾それが特徴の一つであるといっている。また、高橋は、舞台において多数でパフォーマンスする場合、作品化の重要度が音楽であるといっている⁷⁾。さらに、笹本・平田は、エクササイズ・ダンスについて、よりよい動き作りの観点の中の一つに音楽を挙げており、「軽快、好き、覚えやすいなど、音楽はよい動きを誘発し、テンポやリズム、メロディーはダンスを特徴づける。一中略一身体の一部でリズムを刻んだり、動きの大きさをカウントでとらえる音楽は、即興的に動いても再生しやすい」⁸⁾としている。

このように、身体表現に専門的知識と技術を充分持ち合わせている専門家たちは、音楽の力に対してそのきっかけの重要性を語っている。そこで筆者は、身体表現活動経験も音楽的知識も殆どなく、その技術が未熟である学生が、身体活動において音楽をいかに「きっかけ」とするのか、に着目することは、身体表現や音楽表現の共通プログラム指導法へのヒントが探れるのではなかろうかと考えた。前回の身体表現のきっかけ調査では、全体の91%以上の学生が「音楽」をきっかけとして身体表現する、を選択していた⁹⁾。そこで本論は、音楽から誘発される身体表現活動の「きっかけ」に対し、曲目選択を中心に調査を行った。今回は、昨年度「創造的表現活動のための音楽研究」で行った調査結果を参考にし、新たに保育者養成校学生とダンスを得意とする学生に、楽曲選択による表現方法の違いを、アンケート・実験で量的・質的調査にて比較検証することとした。

II. 研究方法

学生たちが身体表現活動を行う際の音楽（楽曲）から受ける「きっかけ」調査のために、以下のように実験を実施した。本論は保育者養成学生を対象とする内容であるが、今回は即興身体表現で行う調査のため、即興身体表現に対して違和感を持つ学生や苦手意識のある学生、さらには1年次という条件も含まれることから、保育者養成校以外のダンスを得意とするダンス部所属学生への調査も行い、資料とすることにした。また、即興表現での調査実施については、その曲から受ける「きっかけ」を、他者からの影響や楽曲の情報などを一切加味せず調査するためである。

6) (公社)日本女子体育連盟, (公社)日本女子体育連盟60周年記念, 第48回全国女子体育研究大会(東京)/SUMMER SEMINAR 2014, 実行委員 編集 飯田路佳著「Yesterday-記憶を包み込んで」『ダンスの力をすべての人へ』p.72 2014年 所収

7) (公社)日本女子体育連盟, (公社)日本女子体育連盟60周年記念, 第48回全国女子体育研究大会(東京)/SUMMER SEMINAR 2014, 実行委員 編集 高橋眞琴著「Today-煌きを広げて」『ダンスの力をすべての人へ』p.81 2014年 所収

8) (公社)日本女子体育連盟, (公社)日本女子体育連盟60周年記念, 第48回全国女子体育研究大会(東京)/SUMMER SEMINAR 2014, 実行委員 編集『ダンスの力をすべての人へ』笹本重子・平田利矢子著『「エクササイズ・ダンス」健美ダンスを創って踊る』p.96 2014年 所収

9) 井中あけみ著「創造的表現活動のための音楽研究」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第31号』p.1-13 所収

1. 対象

調査対象1

T保育者養成大学の身体表現の授業の受講生20名である。保育者養成校ということから、身体表現に対して未経験であり、理解を示していない学生も多く含まれている。

〈対象1〉 T保育者養成大学1年生20名（男2名，女18名）

日時：平成25年12月2日

調査対象2

C大学1～4年生18名，体育学部を含むダンス部所属学生18名に行った。

〈対象2〉 1回目 C大学1～4年生18名，体育学部の学生を含むダンス部
（男6名，女12名）

日時：平成25年11月12日，

2回目 C大学1～4年生11名，体育学部の学生を含むダンス部

（2回目の調査日が定期試験のため調査は男2名，女9名）

日時：平成26年1月28日

調査については，個人名の記載をしない，個人の評価や成績には全く関係しないこと，また，ビデオ等の録画記録を公表しないことを明言し，学生からの承諾を得た後，実験を行った。

2. 実験・調査方法

①音楽を聴くことによって身体表現への「きっかけ」を感じる曲目選択の量的調査

A. 音楽鑑賞による曲目選択の順位調査

被験者は，アンケート用紙にて，調査人が選んだ以下の表の5曲について，CD¹⁰⁾にて2回ずつ鑑賞し，自ら身体表現をしてみたいくなる曲目を選択（鑑賞のみ）した。（選択数は複数可とした）

ギロックのピアノ小曲集より次の5曲を選択した理由については，現代の音楽が多様多様であり，限らない嗜好の幅があることから，楽器の種類を特定し，その音色を明確に理解できるピアノ音楽（クラシック）を選択することとした。また，電子音などの特殊効果表現を交えないアコースティックピアノ演奏とし，適度な演奏時間であること，子どもから成人まで興味が持てる作品集を基準として選択した。

さらに同じ作曲家からの5曲の選択については，作曲技法のブレを最小限にするためと考え，ギロックの中でも今回はその曲想がそれぞれ特徴的な5曲に特定し，以下を選択した。

10) グレンダ・オースティン（ピアノ）演奏 『ギロック／叙情小曲集』ビクターエンタテインメント 録音1998年

〈「ギロックのピアノ小曲集」選曲の特徴について〉

	速度記号	調性	曲想や奏法に関する指示用語	強弱記号等
森のざわめき (Forest Murmurs)	♩=about 112	C dur	Gentry	全体的に <i>pp</i> で演奏される 柔らかなメロディーの旋律である
秋のスケッチ (Autumn Sketch)	♩.=50	h moll	Moving subtly	一定の音型が、短調→長調→短調で繰り返される
はちどり (Humming Bird)	♩.=152	cis moll	moving quickly	軽快な16分音符のリズムが、1拍目のアクセントと共に速いテンポで繰り返される
魔女の猫 (A Witch's Cat)	♩.=about 144	f moll	Fancifully caricatured	強弱の幅が広く、緩急があるバラード風のイメージである
セレナード (Serenade)	♩.=100	Des dur	singing	穏やかな曲調であるが、5曲の中では、右手左手とも音域が一番広く作曲されている。右手 <i>mf</i> 、左手 <i>mp</i> で殆ど演奏するよう指示されている

全音楽譜出版社「ギロック叙情小曲集」より¹¹⁾

B. 曲目選択による即興身体表現活動の評価調査

T大学、C大学共に、質問紙法による曲目選択のアンケート集計結果から上位2曲を選択し、その2曲についての音楽鑑賞を再度2回ずつ行った直後、即興身体表現活動を行った。対象者は、被験者全員である。

調査記録はビデオ撮影で行い、T大学の学生は2人から3人のグループで、C大学は1人から2人のグループで、出来る限りお互いが視界に入らない範囲での空間を確保して調査を進めた。また、他の被験者の実験時にその活動状況が観察できないよう、待機場所の配慮も行った。

活動の記録は、即興身体表現のパフォーマンス評価を行い、総合的数値で表すこととした。

〈分析方法〉

即興身体表現活動実験の分析については、即興身体表現活動の評価（以下 a. b. c. で詳細を説明）を行った。

11) ウィリアム L.ギロック著『ギロック叙情小曲集』p.10,22,27,28,38 全音楽譜出版社

a. 「パフォーマンス評価」をすることの理由

被験者が身体表現を苦手と感じていた場合、その動きが技術面での苦手意識なのか、単なる羞恥心なのか判断しづらい状況の場合がある。また身体表現が得意と感じている被験者において、それがその場の表現として相応しいか（例えば、曲のイメージとは全く見当違いなダンス表現）など、第三者の評価が必要であると判断し、今回は以下の技能評価を使用することとした。この評価基準は、前回の研究「創造的表現活動のための音楽研究」の実験観察記録においても抜粋して使用している¹²⁾

b. 「創作ダンス授業における学習者の技能評価」を用いた評価方法

即興身体表現活動の第3者評価は、佐藤・細川・宮下が作成した「創作ダンス授業における学習者の技能評価」¹³⁾を用い、その中の項目に若干の変更を加えて（※注）評価を行った（保育者養成に適する基準として）。採点方法は、学生1名つき該当するものに、評価者3名¹⁴⁾がそれぞれ1ポイントすることとした。

c. （※注）変更を加えて について

今回の実験の評価基準内容については、身体表現活動のパフォーマンスそのものに対する評価とは違い、身体表現初心者が音楽を聴くことによって、即興で身体がいかにか反応しているかのチェックであることから、高橋（調査人）が佐藤・細川・宮下が作成した「創作ダンス授業における学習者の技能評価」に以下の変更を加えて評価項目を設定した。

即興身体表現のパフォーマンス評価のためのチェックリストについて（高橋）

ア. 身体全体を使える。（原文のまま）
イ. ふらついてでも顔をつけて、身体を投げ出している。（変更） 〈原文〉頭も、身体が動くのにもなって動く ■変更の理由→ 高橋は、ここでの実験の場合、「頭も」というのは「首をつかえるか」と理解すべきと考えている。身体表現未経験者（初心者）の場合、身体のバランスをとるために、目線（顔）は水平方向に固定していることがよくある。経験豊富なダンサーは、迷わず首を上に向けたり傾けたり、身体全体で前傾して身体を投げ出している。しかし、経験の浅いフォーマーは、「その気」になったり、表現することに夢中になったりすると、身体のバランスをとることを忘れて身体を投げ出し、ふらついているシーンもよくみられる。従って今回は、「ふらついてでも顔をつけて、身体を投げ出している」という観点で評価を試みることにした。
ウ. （除外） 〈原文〉視線がしっかり決まっている。 ■除外の理由→ ビデオでの評価では被験者の視線の定まりが明確でなかったため、除外することとした。下記のセ、ソともつながるが、「なりきって」動いていると、自然と視線は定まると考えられる。視線をみることで、他人からは評価しづらい、下のセやソを評価すると考えた。

12) 井中あけみ著「創造的表現活動のための音楽研究」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第31号』p.5 所収

13) 宮本乙女著「創作ダンス授業における学習者によるパフォーマンス評価の研究」

『お茶の水女子大学附属中学校 第34集』p.68,69 2006年 所収

14) 評価者は、身体表現の指導者高橋（東京都市大学）・和光理奈（中京大学）、音楽的見地より音楽表現指導者井中（豊橋創造大学短期大学部）

エ. 身体の中心部から動いている. (原文のまま)
オ. 動きに高低の変化がある. (原文のまま)
カ. 身体をねじる動きがある. (原文のまま)
キ. 前向き後ろ向き, 下向き上向きなどを変える動きがある. (原文のまま)
ク. 空間 (フロアー) の移動が大きい. (原文のまま)
ケ. 空間 (フロアー) の使い方を工夫している. (原文のまま)
コ. 速い動き, ゆっくりとした動き, ストップ, スローなど動きの速さに変化がある. (原文のまま)
サ. 動きに強い動きや弱い動きやアクセントがある. (原文のまま)
シ. 動きの形, 動きの速さに変化を持たせて繰り返す. (原文のまま)
ス. (除外) 〈原文〉動きのつなぎ方がスムーズで, なめらかである. ■除外の理由→ 今回即興であることから, ギクシャクしている場合が多く, 除外する.
セ. 周りを気にせずに, 動き続けることが出来る. (変更) 〈原文〉気持ちもとぎれずに, 動き続けることができる. ■変更の理由→ 即興であることから, 周りを気にせず, 動き続けることができる, とした.
ソ. その気になって (音楽に乗って) 動くことが出来る. (変更) 〈原文〉テーマに良く合っているオリジナルな動きを作り, なりきって踊ることができる. ■変更の理由→ 今回はテーマが無いことから, その気になって (音楽にのって) 動くことができる, とした.

結果, 変更後の即興身体表現のパフォーマンス評価のためのチェックリストを以下とした.

即興身体表現のパフォーマンス評価のためのチェックリスト (高橋)

ア. 身体全体を使える.
イ. ふらついてでも顔をつけて, 身体を投げ出している.
エ. 身体の中心部から動いている.
オ. 動きに高低の変化がある.
カ. 身体をねじる動きがある.
キ. 前向き後ろ向き, 下向き上向きなどを変える動きがある.

ク. 空間（フロアー）の移動が大きい.
ケ. 空間（フロアー）の使い方を工夫している.
コ. 速い動き, ゆっくりとした動き, ストップ, スローなど動きの速さに変化がある.
サ. 動きに強い動きや弱い動きやアクセントがある.
シ. 動きの形, 動きの速さに変化を持たせて繰り返す.
セ. 周りを気にせずに, 動き続けることが出来る.
ソ. その気になって（音楽に乗って）動くことが出来る.

C. 即興身体表現活動後の再度楽曲選択アンケート調査

上位2曲の即興身体表現活動調査の後, 「2曲の内どちらが表現し易かったか」の再調査を行った.

②音楽を聴くことによって身体表現への「きっかけ」を感じる曲目の質的調査

A. 曲目選択による即興身体表現活動調査後の自由記述アンケート調査

曲目選択による即興身体表現活動調査後, 再度どちらの曲が表現し易かったのかの選択に合わせて「自由記述」を行った. 質問事項は, 「即興身体表現を行っている時それぞれの曲にどのような感じ方をしたか」である. この自由記述アンケート調査の結果については, それぞれの語彙を四つに分類し, 言葉から学生の感じ方を推測し表に記すこととした.

B. 実験終了後のインタビュー調査

アンケート調査での自由記述で表現し切れなかった曲への印象やその思いなど, 聞き取り調査にて意見を収集した. 主な質問内容には, 次のようなものを挙げた.

1. 身体表現をしている最中に何を考えていたか.
2. 音楽に対してどのようなイメージが湧いてきたか.
3. 曲のどこに興味を持ったか.

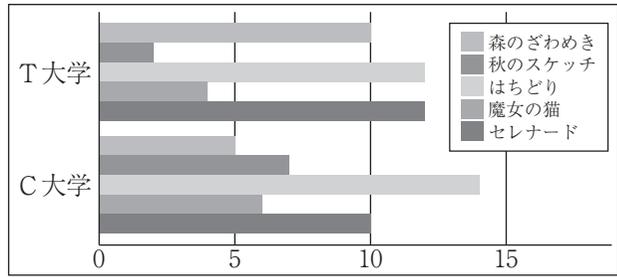
III. 実験結果

①音楽を聴くことによって身体表現への「きっかけ」を感じる曲目選択の量的調査結果

A. 音楽鑑賞による曲目選択順位の結果

T大学C大学の曲目選択結果は, 「はちどり」と「セレナード」が上位2曲となった(一人あたりの選択曲数は自由). 詳細は以下の表である. T大学C大学共に上位2曲選択の傾向が同じであり, 身体表現の経験値に関係なく, 音楽から受ける「身体表現へのきっかけ」反応が同様の傾向にあることが伺える.

	T大学	C大学
森のざわめき	10	5
秋のスケッチ	2	7
はちどり	12	14
魔女の猫	4	6
セレナード	12	10



B. 曲目選択後の即興身体表現活動評価の結果

再度上位2曲の鑑賞を2回ずつ行った後、即興身体表現活動をビデオにて撮影記録した。記録撮影後C大学に関しては、2曲の選択に該当していない被験者も「即興身体表現のパフォーマンス評価」が可能であったため、記録を基に評価を行った。但し時間的な理由から後日の調査となったため、C大学11名(男2名, 女9名)に対しての実験調査となった。

T大学については、実際に被験者全員が表現活動に入ってみた際、立ち尽くしてしまったり、全く曲に値しない表現を行ったりする学生がいたので、2曲ともに評価可能となった4名について、即興身体表現活動の評価を行った。この「立ち尽くし」などに関しては、1年生初心者であること、授業開始時期から間もないことなどが原因として挙げられよう。



即興身体表現活動 (T大学)

〈「即興身体表現のパフォーマンス評価」得点結果について〉

T大学に関しては、20名の身体表現活動調査を実施したが、実際に2曲とも活動できていると判断される学生は4名のみであった。2曲についての評価比較の必要があるため、2曲ともに即興表現活動が可能であった4名のみパフォーマンス評価を行った。(高橋, 和光によるビデオ視聴での判断結果による)。また、評価不可の学生については、「はちどり」の動きについては、積極性がみられることが多かった。

本実験での即興身体表現パフォーマンスチェックリスト得点結果表

	はちどり		セレナード	
	T	C	T	C
ア. 身体全体を使える	3	19	2	21
イ. ふらついてでも顔をつけて、身体を投げ出している	0	23	2	18
ウ. 身体の中心部から動いている	0	17	1	17
エ. 動きに高低の変化がある	4	21	6	27
オ. 身体をねじる動きがある	1	18	1	22
カ. 前向き後ろ向き, 下向き上向きなどを変える動きがある	7	23	12	30
キ. 空間（フロア）の移動が大きい	8	21	12	19
ク. 空間（フロア）の使い方を工夫している	0	15	1	15
ケ. 速い動き, ゆっくりとした動き, ストップ, スローなど動きの速さに変化がある	6	17	5	15
コ. 動きに強い動きや弱い動きやアクセントがある	6	18	3	14
サ. 動きの形, 動きの速さに変化を持たせて繰り返す	4	16	5	14
シ. 周りを気にせずに, 動き続けることが出来る	11	11	8	33
ス. その気になって（音楽に乗って）動くことが出来る	12	11	10	33
各大学合計	62	230	68	278
ポイント合計	292		346	

（1名の学生につき評価者1名が1ポイント）

先に集計した音楽鑑賞のみによる曲目選択結果では、「はちどり」が若干優位となっていたが、このパフォーマンスチェックリスト得点評価結果からは、「セレナード」の得点がT大学、C大学とも優位となっている。特に、C大学のシとスに関しては、2曲の間に大きな違いがみられ、個人が音楽を感じ表現しようとする、曲目の感知度の違いを読み取ることができる。

C. 即興身体表現活動後の再度楽曲選択アンケート調査結果

		身体表現活動前後
T大学	はちどり	18名（内パフォーマンス評価可能者は、3名）
	セレナード	2名（内パフォーマンス評価可能者は、1名）
C大学	はちどり	8名
	セレナード	3名

ここでの結果はT大学のパフォーマンス評価が不可能者を含め、T大学C大学とも、「はちどり」が完全に優位となっている。

T大学の保育者養成学生も，C大学の他学部（体育学部，文学部等）のダンス部学生も，実際の活動時の曲から受ける影響について，傾向が同じであることが推測される。

②音楽を聴くことによって身体表現への「きっかけ」を感じる曲目選択の質的調査結果

A. 曲目選択による即興身体表現活動調査後の自由記述アンケート調査の結果

事後アンケート「何故その曲の方が表現し易かったのか」についての回答から，学生たちの自由記述による感じ方のキーワードを，音楽的見地から「リズム」・「強弱」・「情景」・「感情」の四つに分類した。

「はちどり」

<p>具体的</p>	<p>リズム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・同じリズムの繰り返しが分かり易い ・スピード感が乗りやすい ・ステップしたい ・ちょこちょこしたい ・飛び跳ねたい 	<p>強弱</p> <ul style="list-style-type: none"> ・強弱の音の変化 ・ダイナミックな動き
<p>抽象的・ 心情的</p>	<p>情景</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何かに追われる 	<p>感情</p> <ul style="list-style-type: none"> ・せわしない感じ

その他の文章回答例…… ○曲の速度が，表現の変化として表しやすい。
○感情云々ではなく，曲が体を引っ張ってくれる。
○リズムが変化するので表現しやすい。

「セレナード」

<p>具体的</p>	<p>リズム</p> <ul style="list-style-type: none"> ・曲中の間が興味深い 	<p>強弱</p> <ul style="list-style-type: none"> ・音の盛り上がり
<p>抽象的・ 心情的</p>	<p>情景</p> <ul style="list-style-type: none"> ・きれい ・田舎 ・女の子 ・壮大 ・草原にいる ・自然 ・風をうける ・時の流れ ・ジブリ的イメージ ・夕暮れ ・オレンジの空 ・暖かい涙を流す ・キラキラしている 	<p>感情</p> <ul style="list-style-type: none"> ・繊細 ・優しさ ・もの寂しい ・ゆったり ・穏やか ・幸福感 ・ファンタジー ・明るさと切なさ ・好きな曲 ・気持ちいい ・恋愛感情

その他の文章回答例…… ○曲が穏やかで色々なことがイメージできる。
○感情が湧き起こってくるが，すぐには表せない。
○音の伸びやかさを表現したいと気持ちが高揚する。

上記は、学生たちの自由記述を、具体的表現として上段の「リズム・強弱」、抽象的（心情）表現として下段の「情景・感情」、に分類したものである。その結果「はちどり」は、具体的表現に多く回答されており、「セレナード」は、抽象的（心情面）表現に多く回答が得られていることがわかる。

「はちどり」 ⇒ 具体的（速さ，ダイナミック，リズム）に動かされていく。
「セレナード」 ⇒ 自分の感情が湧いて動く（動きたい or 動きたいがすぐには動けない）。

B. 実験終了後のインタビュー調査の結果

即興身体表現活動後の自由記述での結果に合わせて、インタビュー調査を行った。質問事項は次のようなものを挙げた。

1. 身体表現をしている最中に何を考えていたか。
2. 音楽に対してどのようなイメージが湧いてきたか。
3. 曲のどこに興味を持ったか。

「はちどり」

参考文章回答例…

1. ・曲の速度が、表現の変化を表しやすい。
・せわしない、とこかくはねようと思った。
・男性役と女性役のお芝居がしたい。
2. ・感情云々ではなく、曲が体を引っ張ってくれるから動くことが出来る。
・音楽に合わせていれば動く方向や動きのパターンが自然と決まった。
・音楽に追い込まれて動いていた。
3. ・メロディーや音が変化するところ。
・きびきびとめりはりがある。
・音に踊らされる感じ。

「セレナード」

参考文章回答例…

1. ・曲が穏やかで色々なことがイメージできる。
・自然と戯れる感じ。
・リラックスしてしまい、思いと動きが繋がれなかった。
・感じるまま動きたいのに、どう動いてよいかわからない。
2. ・色々な感情が湧き起こってくるが、すぐには表せない。
・曲がゆったりとしていて、時が流れる感じをすぐに動きに結びつけられなかった。
3. ・流れるように音がつながっているところ。
・音が自分という存在をより大きくしてくれる気がした。
・音が心地よく自然に入り込んでくるところ。

ここでのインタビュー調査では、「はちどり」のインタビューの下線部分からもわかるように、音楽の影響を受けやすく、身体を動かすきっかけとなっている音楽は「はちどり」であるといえる。一定のテンポとリズムの軽快さ、適度な音高の変化など、彼らの身体表現へのイメージを与える要素を「はちどり」が多くもっていると考えられる。

C. インタビュー調査を終えて

インタビュー調査を終了した直後（終了を告げた直後）、数名の学生が、「『はちどり』は、踊り易いと感じたが、本当は『セレナード』を表現したい」「『セレナード』の音楽から感じる何かを表現したいが、今それを的確に表現できない、どう動いてよいかわからない」などの意見を述べたのである。これは、T大学2名、C大学3名から意見があがり、その後それについて共感した他の学生にも同じ反応が現れた。

そこで再度「自分の身体を自由に（思った通りに）表現することができたら、どちらの曲が表現したいですか。」という質問を、パフォーマンス評価した学生T大学4名、C大学11名行ったところ、15名中14名が「セレナード」と回答したのである。

そこで、学生たちの音楽に対する感じ方の変化を、時系列で並べてみた。

○実験前（図1参照）

CD鑑賞での <u>表現し易</u> そうな曲とは…（調査数38名 複数選択可能）
「はちどり」 > 「セレナード」

○実験後

実際動いて <u>表現し易</u> かった曲はどちら…（調査数31名）
「はちどり」（26名） > 「セレナード」（5名）

しかし、図2 本実験でのパフォーマンスチェックリストの評価では、



「セレナード」の方が評価得点が高い。

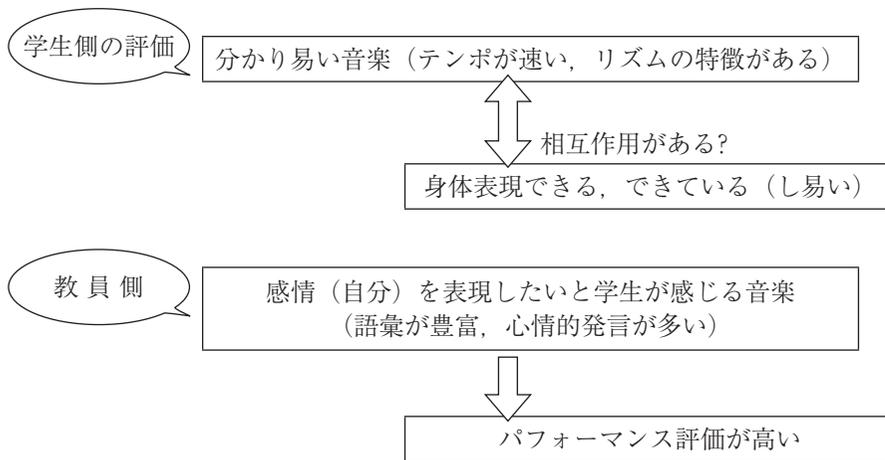
○実験後の振り返り

実験後、本来の自分の心情を表現したい曲はどちらかと振り返ると…
「はちどり」（1名） < 「セレナード」（14名）

IV まとめと今後の課題

今回の実験は、身体を媒体として音楽を表現するという角度から、学生たちがどのように音楽を感じ身体で表現したいと感じているのか、その表現への影響について量的調査と質的調査の双方から調査したものである。

ここでの調査では、学生たちにとって、音楽から受けるイメージは「表現のし易いもの」と「表現したいもの」とは、先入観によるズレがあるのではないかということがみえてきた。それは以下のように考えられる。



これら教員による評価結果と学生の感じ方の違いの要因の一つには、流行の音楽、現代社会のテンポ感、流行のダンススタイルというものへのイメージが、彼らの表現への意識に偏見を持たせているのではないかと考えることが出来よう。また彼らは、リズムカルなヒップホップダンスが、ダンスと呼ばれる全てであるかのように考えさせられているのかもしれない。しかしながら今回、彼らが「音楽から感じる何かを表現したい (自分らしく)」ことと、「音楽に表現させられる (誘導される)」という二通りの感じ方を認識できたことは、自己の先入観や偏見から離れた能動的な表現活動への可能性を持っていることを示唆しているといえよう。

幼児の音楽教育法を学ぶにおいて、学習すべき曲目やジャンルは実用的で即戦力となる具体的教材研究や技術習得に重きが置かれることは当然であろう。また、ピアノ学習においても、読譜や演奏技術を決められたメソッドで確実に習得していくことが理想であり、そこだけに時間をかけてしまうことも少なくない。しかし、子どもたちの豊かな表現の育ちや、その表現力をサポートしていく保育者の使命の一つとして、保育者自身が様々な角度から音楽を感じる視点を持ち、さらに豊かな感情や心情、自然や情景などに対する表現法を体得していることは、表現教育の発展の重要な鍵となるはずである。

近年の学生たちのコミュニケーションの手段や方法には、この感情や心情の表現力の乏しさが危惧されている。また他者と自己を繋ぐ表現に戸惑いや違和感を持つ学生もみられる。今回の実験・調査は、表現力の育成が求められる教育現場での新たな音楽表現学修を目指す

「多角的な音楽学習の必要性」を確認したと考える。

今後の課題は、様々な表現のきっかけとなる音楽作品や特徴となるフレーズを取り上げ、学生たちが身体表現活動を通して、「きっかけ」となる音楽から創造的な表現を感知できるよう、その感知のための音楽学習方法を実験・考察し、また音楽の気付きへの実証研究を続け、感性豊かな保育者のための音楽教育を進めていきたい。

参考文献

- ・西 洋子・野口靖子著「保育者としての身体的感性の育成～授業での身体表現の経験による“共振”の段階の変化～」『東洋英和女学院大学 人文・社会科学紀要 22』p.13-30 2003年所収
- ・西 洋子・野口靖子著「保育者としての身体的感性を育てる教育」『保育学研究 第43巻第2号』p.42-51 2005年 所収
- ・山崎晃男著「音楽と感情についての心理学的研究」『大阪樟蔭女子大学 児童学科研究紀要 No.8』p.221-232 2009年 所収
- ・高野牧子著「幼児期の感情表現および意識的な身体表現による母子間のコミュニケーション」『山梨県立大学 人間福祉学部 紀要 Vol.5』p.17-34 2010年 所収

謝辞

本研究の調査にご協力くださいました身体表現研究者の先生方、ならびに受講生のみなさまに深く感謝申し上げます。